

所謂人間宣言について

矢野主税

所謂「人間宣言」について

渡辺清の「私の天皇」によれば、次のように述べている。

「一九七七年八月二十四日、

けさの新聞（朝日）に『天皇初めて終戦悲話を語られる』という見出しで、昨日天皇が栃木県的那須の御用邸で宮内庁記者団と会見し、二十一年の元旦に出した詔書の第一の目的は、明治天皇の『五箇条の御誓文』をあらためて国民に伝えることであって、天皇の神格化否定は『二の問題』だった、といった記事が八段あつかいで大きく出ている。

相手が宮内庁記者団だから、十項目にわたる質問の仕方にも必要以上に控え目で、大きな扱いのわりには鋭さのかけた底の浅いものになっているが、それでも天皇の返答で二、三カ所ひどく気になったところがあったので、参考のために記録しておく。

問、『人間宣言』の冒頭に五箇条の御誓文を持ってこられたのは陛下の御意志と伺っておりますが。

天皇、あの宣言の第一の目的は御誓文でした。神格（否定）とかは二の問題でありました。当時アメリカその他外国の

圧力が強かったので、国民が圧倒される心配がありました。民主主義を採用されたのは明治大帝のおぼしめしであり、それが五箇条の御誓文です。大帝が神に誓われたものであり、民主主義が輸入のものでないことを示す必要が大いにあったと思います。

(はじめは) 国民はだれでも知っていると思い、あんなに詳しく書く必要はないと思いました。当時の幣原喜重郎首相とも相談、同首相がGHQのマッカーサー最高司令官に示したら『こういう立派なものがある』と感心、称賛され、全文を発表してもらいたいとの強い希望がありましたので、全文を示すことになったのです。

あの詔勅(人間宣言)は、日本の誇りを国民が忘れると具合が悪いと思いましたので、誇りを忘れさせないため、明治大帝の立派な考を示すために発表しました⁽¹⁾」

渡辺はこのように、朝日新聞にのせられた所謂「人間宣言」問答の全文を引用しながら、

『「五箇条の御誓文」が『民主主義』だとは初耳である。『上下心を一にして』とあるが、そもそも人間に『上下』のあるような民主主義があるのか。この狙いは、『大に皇基を振起すべし』とあるように天皇制のためのものであって、民衆の幸福のためなどと、どこにもうたっていないではないか。』と批判している。

私は新聞のこの「人間宣言」問答を読んで、いくつかの疑問を感じるのであるが、今はそれらは一応おいて、最も問題と思うのは、天皇が神格否定について、あれは「二の問題」としたことだと考える。というのは、この詔書が天皇の「人間宣言」として受け取られていることから明らかなように、一般には、天皇の神格否定こそ、この詔書の中心点だとして受け取られてきたからである。⁽²⁾そしてその点こそ、実はアメリカ側の要求するところであつたといわれている。⁽³⁾では、果してこの詔書は、「人間宣言」＝神格否定としての詔書ではなかったのであろうか。

(一) 問題の所在

さて、「二の問題」とは一体どういう意味であろうか。恐らく普通の表現によれば、「二の次の問題」というものであろうか。これについて、一九七七年八月二十四日の毎日新聞朝刊では、「二の問題」は「第二の問題」と注釈を入れている。このように「二の問題」が「二の次の問題」即ち第二の問題であるとすると、所謂「人間宣言」は、神格否定よりも五箇条の誓文を国民に示すことが、「第一の目的」であり、第一の問題であつたわけであり、天皇自身、「あの宣言の第一の目的は御誓文でした」と明言する如くであつたのであろう。

しかし、天皇の発言が右のようであつたとすると、それは当時の文部大臣前田多聞の伝えるところと全く異なっている。即ち、詔書案の作製者たる前田多聞自身の手になる『「人間宣言」のうちそと』によると、

「先ず最初に詔書案に大きく描き出さねばならぬ点は、幣原さん（当時の首相）から渡された例の英文の意味である。出来上がった詔書中、この意味の強く現われている箇所は第五節目である。曰く、『然れども朕は爾等国民と共に在り、常に利害を同じうし休戚を分たんと欲す。朕と爾等国民との間の紐帯は、終始相互の信頼と敬愛とに依りて結ばれ、単なる神話と伝説とに依りて生ぜるものに非ず。天皇を以て現御神とし、且日本国民を以て他の民族に優越せる民族にして、延て世界を支配すべき運命を有すとの架空なる觀念に基くものに非ず。』詔書全部はつまりこの節にある文句を言いたいために出来たのだと言うことができる。……この第五節の文句はほとんど原文通りといつてよいほどだと記憶する。⁽⁴⁾」

と述べている。ということは、この詔書の案文がつくられた時は、所謂「人間宣言」即ち天皇の神格否定こそ最大の眼目として起草せられたといえる。前田の同じ記述によると、前田が一応案文をつくり上げて天皇にみせると、天皇はこれに

所謂人間宣言について

対して、

「これは結構だが、詔書として今後国の進路としてかように進歩的な方向を指し示す場合に、その事柄がなにも突然に湧き上がったというわけでなく、我が国としてはすでにかような傾向が、明治大帝以来示されて居るのであり、決して付焼刃ではないという事をも明らかにしたい。そのなよりの例は、明治の最初のときに、明治天皇が示された五箇条の御誓文であつて、民意を大いに暢達させるとか、旧来の陋習を破り天地の公道に基くとか言う思想は、これから大いに万機公論に決していこう。築き上げる新日本の伏線となるものである。だから何かそういう意味も詔書のなかに含ませてもらえないだろうか。」

との要望を出したという。その結果、五箇条の誓文をそのまま冒頭に引用することになったといつてゐる。

この記述は当時肺炎で床についていた幣原首相に代つて天皇に直接詔書案を差し出した前田文部大臣(5)の記述であるから間違いがあるとは思えない。

ところが、天皇の話はこれとは随分異なつてゐる。天皇のいうところは前述したように、五箇条の誓文を国民に示すところ、そしてそのような立派な民主主義の採用が明治初年に行われたことを国民に知らしめることこそ、第一の目的であつたという。

一方前田の記述をよくよんでみると、所謂人間宣言即ち神格の否定にこそ、この詔勅の眼目があり、五箇条の誓文をつけたのは、今後の日本の進むべき新しい方向が、明治初年の五箇条の示した方向と同じ方向であることを示す為のものであるということになり、五箇条の誓文は、詔書全体からみれば単なる序論的なものにすぎないように思われる。文の構造からみても五箇条の誓文はいかにもとつてつけた感じはぬぐえまい。即ち、前田のいう所謂「人間宣言」こそあの詔勅の「第一の問題」であつたという感がする。

例えば、オーテス・ケーリーの「天皇の『人間宣言』に思う」によるに、ケーリーが高松宮と会見した時のこととして、「話は元旦の詔書に及んでいった。ぼくはあの中に、『敗北』と『国民』がでているのは事がはっきりしているし、また『おちいさん』の『五箇条の御誓文』を持出したのもよいことだった。とくに次の箇所がよかった。⁽⁶⁾」
として、「然れども朕は爾国民と共にあり」から「延て世界を支配すべき運命を有すとの架空なる觀念に基くものに非ず」までをあげている。知日派学者オーテス・ケーリーも前田が第一の問題とした点を、やはり最も重要な点として指摘しているのである。

以上によって何われるように、天皇の神格否定の条こそ「第一の問題」であるとすれば、五箇条の誓文はどうみても「二の問題」以下でなくてはならぬ。しかし、毎日新聞（八月廿四日）の伝えるところによれば、天皇は「身をのり出して」五箇条の誓文こそ「第一の目的」だと言ったという。とすれば、天皇は所謂「人間宣言」よりも五箇条の誓文に重点をおいていたことは間違いない。この場合、天皇は一九四六年元旦において、表面は兎も角、内心では神格否定の人間宣言など必要ないと考えていたか、それとも一九四六年から一九七七年までの間にそう考えるようになったのか、何れかであろうと思われる。しかし、何れの場合においても、天皇が神格否定の宣言を軽視し、五箇条の誓文を重視する考え方が根柢にあった筈である。そうでなければ前田が記述したような事実関係を忘れる筈がない。では何故に神格否定を軽視し、五箇条の誓文を重視したのであるうか。

（二）人間宣言—神格否定について

「人間宣言」と五箇条の誓文の関係について、天皇がどう考えたかの答は、記者団との問答の中にでているように思われる。あの問答では、第一、民主主義は明治の初から日本に存在したもので、敗戦後新しく輸入したものではない。第二、所謂人間宣言について

日本の誇を忘れさせない為五箇条の誓文を国民に示した、といっている。即ち、民主主義は少くとも明治初年以來のものであり、その証拠は五箇条の誓文である、これによって国民を導きたい、というものである。ということは、五箇条の誓文こそ民主主義国日本の証拠であり、それこそ国民に告げなかったところで、神格否定などは問題でないといっていると受取れる。以上のように解しうるからこそ、渡辺清の、「五箇条の御誓文が民主主義だとは初耳である」という批判もでてくるのである。

このように神格否定の輕視、五箇条の誓文の重視が天皇の意志であつたとすれば、一般にいわれているように、この詔書を「天皇の人間宣言」と解することは誤りであるということになる。一面から言えば、世間一般はあの詔書を天皇の「人間宣言」と受取り、天皇はそれを三十年間も否定しなかったということになる⁽⁷⁾。

以上みてきたところによって、二つの問題がでてくるようである。第一には、何故人々は、この詔書を天皇の「人間宣言」と誤解したか、何故天皇はそれを否定しなかったのか。第二には、五箇条の誓文と民主主義との關係如何、特に明治初年の五箇条の誓文と、敗戦直後におけるその政治的解釈如何である。

はじめに、まず第一の問題についてであるが、これは二つの側面から考えられる。一つは天皇の立場、もう一つは国民の立場、即ち宣言を發した側とそれを受取つた側とである。

(1) 天皇の立場 天皇は勿論自分が神であるなどとは考えなかった。「神」という言葉の内容は色々あるが、この場合の神は全智全能の神、所謂ゴッドと、天皇は自らを考えていなかったという意味である。例えば「本庄日記」によれば、「三月九日朝天機奉伺の際、林陸相が議會において答弁せる天皇機関説に付御下問あり、越へて十一日議會の速記録等に付、奉答する所ありしが後刻更に御召あり、自分の位は勿論別なりとするも肉体的には武官長等と何等変る所なき筈なり、從て機関説を排撃せんが為自分をして動きのとれないものとする事は精神的にも身体的にも迷惑の次第なりと仰

せられ、決して左様の次第にあらずと奉答す。」⁽⁸⁾

これは所謂天皇機関説問題が起こつていた時のことであるが、天皇の考では肉体的な点では本庄武官長も自分も同じく人間であるにすぎないといっているわけである。では何故天皇が、そのような一面かわり切った事を言つたのかというと、同日記昭和十年三月二十九日の条に、

「陛下は更に、理論を究むれば結局、天皇主権説も天皇機関説も帰一する所同一なるが如きも、……云々と仰せられる。之に對し軍に於いては天皇は現人神と信仰しあり、之を機関説により人間並に扱ふが如きは、軍隊教育及統帥上至難なりと奉答す。」

とあるように、本庄は天皇に對し、軍隊では現人神として信仰する天皇教ともいふべきものが存在するので、天皇機関説の如く、天皇を國家の一つの機関にすぎぬとて、一般人間並に取扱うのは至難の事だと奉答したという。即ち、天皇自身は天皇機関説でも天皇主権説でも同じことだとするのだが、本庄は天皇は現人神であられるという理由で機関説は不可といっているのである。この場合、天皇主権説、天皇機関説を本庄武官長がどう解したかは別として、兎に角、軍隊に天皇教ともいふべき天皇信仰が存在していたことははっきりしている。それは単に本庄武官長の意見であるのみではなく、軍隊全体の信仰であつたことは、真崎教育總監が、昭和十年四月四日軍隊教育について發した訓示の中に、

「天祖の神勅炳として日月の如く、万世一系の天皇かしこくも現人神として國家統治の主体に在すこと疑を容れず。」⁽⁹⁾とみえているところで明らかであろう。

天皇自身、軍隊におけるかかる天皇教の存在は知つていたに違いない。だからこそ、「自分の位は勿論別なりとするも」とことわたつた上で、「身体的には武官長等と何等異なる所なき筈なり」とつけ加えているのであらう。天皇は自分が現人神と信仰されるのは、その「位」の故であり、現実の肉体は人間であると考えていたと見るべきであらう。

ここで想起するのは、前述前田多聞の「『人間宣言』のうちそと」の中の次のような記録である。

「これより先き、たしか十二月の初めごろであったと思う。臨時国会の予算委員会で、ある議員から私に質問があった。文部大臣に尋ねるが、いったい天皇は神であるか神でないかそれを返事しろと激しい口調の質問であった。その時私は、いまのご質問に対しては私はこう言いたい。天皇はカミであり、またカミでない。なぜならば、神という日本の言葉と、ゴッドという意味をもった神との間には非常なちがひがある。私は無学でよくわからんが、日本の神というのは、キリスト教で言うような全智全能の神とか造物主とかいうような意味でなく、至上至高の地位に居られる方という意味ではないか。そこで質問が、天皇はゴッドのような神だと考えるかと、こうおっしゃるならば、それは神ではないと答える外はない。ところが日本の古来からの觀念で、現世において最上位にいらっしゃる方であるとの意味ならば、やはりそれは神であると答えなければならぬので、神という言葉の意味によつて返答がちがうんだというように答えて問答はうやむやに終つたことがあつた⁽¹⁰⁾」

と。しかし、たとえ天皇が自らの肉体は普通の人間であると主張したとしても、その肉体が「位」と別々になることは實際にはあり得ないわけであるから、従つて本庄のように「天皇は現人神」―現実に人間界に存在する全智全能の神―と考へたのは、天教の信者である本庄にとつてはごく自然のことであつたであらう。即ち、天皇の側からみれば、位は位、肉体は肉体と區別して―前田の考えもそうであらう―、肉体をもつ以上自分は全智全能のゴッドではないと主張したのであらう。しかし、それは天皇側の考えであつて、本庄や真崎の側―軍隊の側からみれば天皇はやはり信仰の対象であり、「現在するゴッド」―少くとも一種のゴッドであると考えたといえるであらう。

(2) 国民の立場　こんどは、あの詔勅を「人間宣言」―神格否定と受取つた国民の側からみるとしよう。英国人チエンパレンの「日本事物誌」⁽¹¹⁾によれば、

「天皇崇拜ミカドおよび日本崇拜〔忠君愛國教〕は、その日本の新しき宗教であつて、もちろん自発的に發生した現象ではない。……天皇は太陽女神の直系の子孫であり彼自身は地上の生き神〔現神〕アキツカミであつて自分の臣民に対して絶対的な忠誠を当然に要求できるものである、という神道の教義を主張した。……表面上は信教の自由を掲げている制度のもとにおいて、ある神道の祭式には官僚の出席が求められ、諸学校では毎年度天皇の写真の前に拝礼するという式典が制定された。しかし新しい布教の要塞ともいふべきものは学校でありその若い生徒達に歴史を教えるときには、あらゆる事を尊王主義の一点に集中させ、古今の狀態の相違はできるだけ減少させようとする。陸海軍の新兵に与える教訓もまた同様である。……一方では慈悲深き君主があり、他方では君恩に感謝する忠実なる臣民があり、完全なる君民合体があつたという。そして日本においては、いまだかつて、外国によくあるような不逞反逆の行為によつて汚されるようなことはなかつたと主張する。……官僚階級があらん限りの権力を用いて組立てようとしている思想の構造は、以上の如きものである。官権の行使の結果は、歴史的真理を固執しようとする者に対しては、刑罰を加えるまでに至っている。」とのべ、つづいてチェンバレンは、

「日本の新宗教は現在の初期の段階にあつては、神聖なる天皇と皇祖に対する崇拜、軍隊の頭首としての天皇に対する絶対服従から成立つ。さらにこれと呼応して、天皇は普通のつまらぬ王や皇帝とくらべて神の如く優れているのと同じく、日本も、普通のつまらぬ国々よりもはるかに秀でているという信仰から成り立つ。……農商務大臣大浦男爵は次のように記している。……『わが国に宗教的信仰を必要とすると考えられるならば、それは忠君愛國の宗教、尊王主義の宗教―、換言すれば尊皇教に改宗せらるべきである。』」⁽¹²⁾

この点に関し齋藤正二は、この新宗教の教祖は伊藤博文と元田永孚であつたといつてゐる。⁽¹³⁾ 齋藤によればこの新宗教の所謂人間宣言について

成立は、教育勅語が發布された明治二十三年前後の頃と考えている。⁽¹⁴⁾ それはチェンバレンのいう、学校教育における天皇の写真礼拝とか、斎藤のいう、教育勅語の公布と共に確立して行つたとみてよからう。⁽¹⁵⁾

こう考えてくると、国民の側からみれば、天皇は信仰の対象であり、天皇自身の否定にもかかわらず一種のゴッドであつた。すなわち、所謂「御親影」の拝礼は、単なる尊敬ではなく、それは礼拝、おがむことに値するものとして拝礼されたといえよう。従つて、天皇は国民にとっては礼拝の目標となる一種のゴッド—人間にして人間にあらざるものと考えられていたわけである。前田がいうような、日本の神、「至上至高の地位にあられる方」としての神は、古典に現われる伝説・神話の神であつて、現実存在する「現人神」とは異なるものといわねばなるまい。

兎に角、国民の側からみた場合、天皇はあくまでも一種の、信仰の対象としてのゴッドであつた。いや、事実軍隊に於いては現人神として信仰されていたわけであるが、それは敢て軍隊のみのことではなく、一般国民に対しても国家の要請するところであつた。

例えば、「憲法義解」によれば、明治憲法第三条に注して、

「蓋し天皇は天縱惟神至聖にして臣民群類の表にあり。欽仰すべくして干犯すべからず」

といつてゐる。その意味は「天皇は生れながらにしてこれ神である」と解することができる。ところが枢密院の憲法制定會議に提出された「憲法説明」によれば、「天皇は至尊至嚴神聖不可侵にして、臣民群類の表にあり⁽¹⁶⁾」とみえるのみである。即ち「至尊至嚴」が「天縱惟神」と變化したのである。憲法義解も憲法説明も共に伊藤博文をとり巻く多くの人々の意見をくんで成立したものであることは周知のところであるが、いよいよ帝国憲法解釈の公定本としての憲法義解においては、伊藤は彼の天皇に対する信仰を告白して「天縱惟神」と書き換えたことを思わせる。

この天皇信仰は軍隊が学校教育を通じて国民に強制的に宣伝されて、国民の間には、「万世一系の天皇を奉戴するの最

大榮譽と最大幸福」とする方向が確立されていた。⁽¹⁷⁾ 勿論、大正期になって一時的に天皇の「現人神」イメージが崩壊したともいわれるが、けれども大正末期には再構築されたといわれている。⁽¹⁸⁾

さて、この現人神思想は太平洋戦争の頃となると、毎日のように国民の間に宣伝された。例えば、昭和十八年八月二十九日の毎日新聞には、

「我等は常に我が大元帥陛下を現身神として仰ぎ奉っている。我等一億臣民はただ大元帥陛下の大命に奨励して一切を犠牲として勇往邁進せねばならぬ」

とみえている。このような天皇を現人神とする考え方が国民の中に浸みこんでいたことは、所謂「人間宣言」の中でわざわざ天皇が架空なる観念であるとして否定せねばならなかったことで明らかであろう。

いや、単に宣伝されたのみではない。この思想は強制的に、弾圧的に国民に求められていた。例えば、

「戦争を遂行するために、天皇を神格化し、宗教的な權威をもたせて、国民精神を総動員することは国家権力にとって緊急の課題だったわけです」⁽¹⁹⁾

と批判されたように、強制的に天皇神格化を国民の間にすすめた。その結果、

「国家権力が、天皇陛下とイエス・キリストとどちらが偉いかといった」⁽²⁰⁾

というような弾圧的な神格化強要にまで及んだと指摘されている。

このように明治の半ば頃につくられた天皇教は、天皇を単なる人間から信仰の対象にまで引上げ、昭和になってはその信仰は強制と弾圧を伴うに及んだ。それ故に、天皇自身は自分は一般の人間と異なるところはないと考えたとしても、国民の側からみれば、現実の人間としての天皇と、信仰の対象としての天皇は重なり合ってみえるわけで、しかもそれが宣伝され強制されるに及んでは、天皇は伝説・神話にみるカミではなく、一種のゴッドであると考えられるに至ったといえ

よう。

金森徳次郎は一九四六年の「日本国憲法制定議会」において、

「恐らく日本国民は信仰に依る天皇と、理性に依る天皇との双方を持って居ったのであり、時代時代によってその考え方は違っていたのではないかと思うのであります」⁽²¹⁾

と述べている。この場合、時代時代により云々は別として、少くとも明治半ば以降の天皇教の成立にあたっては、理性による天皇は影がうすれ、国民の側からみれば信仰に依る天皇のみが強調され、強制される国民指導が国家権力によって行われるようになった。その結果として、「占領史録」(第一巻)「降伏後に於ける米国初期の対日方針」の「説明」によれば、政府自ら認めているように、

「天皇制度が本質的に民主主義なる存在に非ることも論議の余地なしと雖も、特に我国に於いては独特の神話的神格的性格を帯び居り、而も右諸性格が従来我国の政治を支配し来りたる封建的政治勢力により、不自然なる程度に迄強調利用せられ来り、云々」⁽²²⁾

という如くで、敗戦に近づくにつれて天皇が信仰の対象としてゴッド的性格をもつものとして国民に強調されてきたのであった。

こういう精神状態にあった日本人にとって、所謂「人間宣言」が出されたとき、天皇が「神の世界」から「人間の世界」へ下りてきた、と国民が受取ったのは当然であつたであろう。例えば、「図説戦後世論史」第二版(NHK放送世論調査所編)によれば、

「では天皇に対する感情はどうであろうか。旧憲法には『天皇は神聖にして侵すべからず』という一項があるように、戦前の人々にとって、天皇は現人神であり、崇拜、畏敬の念をもつ対象であつた。71—5図にあるように、戦前には少

くとも八割の人が『天皇は神、あるいは普通の人間以上の存在』だという考え方をもっていた。この『神』から『人間』への認識の転換には、二十一年の『朕と爾等国民との間の紐帯は終始相互の信頼と敬愛とによって結ばれ、単なる神話と伝説とによりて生ずるものに非ず……』という『天皇の人間宣言』と、それに続く『御巡幸』が大きな役割を果たしたといわれる⁽²³⁾と総括している。

このようにみえてくると、天皇自身は自分とは普通の人と変らないのだから、敢て「人間」宣言する必要はないと考えていたのであろう。⁽²⁴⁾それ故天皇自身の日本の民主主義に対する考え方を、五箇条の誓文という形で宣言すれば事足りる、としか考えなかったのではなからうか。

(三) 五箇条の誓文と民主主義

次に五箇条の誓文と民主主義との関係、特に(1)明治初年、(2)自由民権時代、(3)敗戦直後における五箇条の誓文の政治的解釈について考えてみたい。

(1) 明治初年の場合

明治元年の五箇条の誓文成立の経緯については、例えば稲田正次「明治憲法成立史」(上巻)などに詳しいから、今更ここでふれることはしない。ただ、この誓文が果して民主主義的性格を備えていたか、成立当時そう考えられていたか否かについて考えてみたい。

明治維新については、例えば淡野安太郎「明治初期の思想」第一節に、

「文明開化運動に課せられた――市民社会の形成と統一国家の形成という――二重の使命が見逃がされてはならないであろ

う。……ところで右の二重性格の背景には、明治維新が王政復古、古というかたちで実現せられたという歴史的事情が、重なり合っている事実を無視することはできない。……こうゆうふうには明治維新は『維新』であると共に『復古』であるところから、『明白に二個敵対の大主義』(國民之友二〇七号、徳富蘇峰「維新革命史の反面」)に導かれた『双頭の蛇』(上同)であったと称せられるのである。⁽²⁶⁾

と述べているように、又、大久保利謙が指摘するように、「固有之御国体」と「万国之公法」とを同時に行つてゆきたいという、進歩と保守、革新と伝統があつたことは、一般によく知られているところである。⁽²⁶⁾

五箇条の誓文が一応進歩革新の線にそうした政治方針の宣言であつたことは疑う余地はない。けれども、その進歩革新はどういう性格のものであつたらうか。私はそれを今、誓文成立の過程について考えてみたい。

「明治憲法成立史」によれば、明治の初、「朝廷の下に新政府支持の諸侯を大いに糾合する必要を痛感」⁽²⁷⁾して、福岡孝弟等によつてその問題が具体的に取上げられ、福岡の明治元年一月八日頃の建議に、「一御政体之列侯会盟議事之体を可被仰付哉、一列侯会盟始之事期限を立て諸侯召命嚴敷可被仰付哉」⁽²⁷⁾とみえ、その結果由利公正が「会盟議事之体」を起草した。従つて最初の案文には「議事之体大意」⁽²⁷⁾と題する五箇条があらわれた。この由利案に対して福岡が修正を加え「会盟」⁽²⁸⁾と題せられた。その後しばらくして三月五日「諸侯会盟并乞喰に至迄合点の行く様に主上より御示諭の事」⁽²⁹⁾との朝議が定められた。ついで木戸孝允はこれらについて建白を奉つたが、その建白について彼自身、「速に朝廷の規模を示し、天下の侯伯と誓ひ億兆の向ふ所を知らしめ藩主をして其責に任せんと欲し切に之を上言し朝議遂に斯に決し、五条を撰て之を掲げて大礼を布き、同三月天子親ら公卿群百の諸侯伯共に在官のものと誓ふ、兵馬匆々の間一定の律なし、先之を以て根本の規定となし天下の方向を定む」⁽³⁰⁾と説明している。この木戸の建白によつて「国是宣布の機運はにわかに促進され」⁽³¹⁾た。

これより先、福岡は更に五箇条の綱目の外に会盟の形式について詳しく規程し、「会盟式」と題して盟約式の次第について述べ⁽³¹⁾、その後に「盟約」と題して五箇条を述べた案文をつくっている。⁽³¹⁾ ついで議定、参与の集会があり、「天子盟約の事を止め、国是について」「臣下より天子に対して誓詞を奉ることに決した⁽³²⁾」という。ついで三月十二日木戸の意見で、「総題目会盟式と改め、五箇条の前の題目の盟約を誓と改め⁽³³⁾」た。更に三月十三日、木戸、岩倉、三条の三人によって最後の修正が加えられ、三月十四日最終案が成立した。⁽³³⁾ ここでは、会誓式とか誓いという表現も一切削られているのは周知の如くであり、三月十四日天皇は「天神地祇を祭り、天皇御拜の後、三条誓文奉読、公卿諸侯順次誓書に署名を行った⁽³⁴⁾」のである。

私がここで指摘したいのは、始めはずっとつけられていた題目が幾変遷の後、全く姿を消したについてである。いま、その表をつくってみると次の如くである。

執筆者	日時	総題目	題目
(福岡孝弟)	(二月八日)	(列侯会盟)	
由利公正	一月九日	議事之体大意	
福岡孝弟	?		(列侯)会盟
(朝) 福岡孝弟	三月五日	諸侯会盟	
(朝) 議	?	会盟式	盟約
三月八日			誓詞
木戸孝允	三月十二日	会誓式	誓
三月十四日			(諸侯誓書署名)
木戸一岩倉 三条			

この表をみて注目されるのは、第一には総題目、題目が最後に及んで省かれているということと、第二には、始めは諸侯会盟、(諸侯) 会盟等とあつたのが全く姿を消したという点であろう。この両者を具体的にみると、始めは列侯とか諸侯とかが会盟・会誓する形をとっていたのに、最後にはそれらをすべて省いている。一体これは何を意味するものであろうか。

私はこれを五箇条の誓文と共に発せられた宸翰に求めることができるかと考える。即ち宸翰の最後のところをみるに、
「汝億兆能々朕が志を牒認し相率て私見を去り公議を採り朕が業を助けて神州を保全し列聖の神靈を慰し奉らしめば生前の幸甚ならん。」

とある。これは明治天皇から当時の臣民に対する命令の形をとっているので、前述のように天皇が天神地祇を祭つて五箇条を誓い、公卿諸侯が誓書に署名する形をとっているが、天神地祇に誓うのは天皇であり、公卿諸侯は天皇に服従する形式をとりながら、臣民に対しては命令する形をとっていることになる。

ここで想起するのは五箇条の誓文最後の条、即ち、「知識を世界に求め大いに皇基を振起すべし」という条項である。知識を世界に求めるのは皇基を振起する為であるという解釈は⁽³⁵⁾いうまでもないにしても、「皇基を振起すべし」という文句は、五箇条全体の締めくくりとみることもできるのではなからうか。「広く会議を興し万機公論に決すべし」以下の条々は、すべて皇基を振起する為である、従つて汝等臣民は朕が意を体せよというのが、「天子が天神地祇に誓を立て、公卿諸侯がこれに服従する形」の真意ではあるまいか。

例えば木戸案が会盟式、盟約の代りに会誓式、誓を用いたとしても、これも又天子、公卿、諸侯が共に誓い合うという形――従来の列侯会盟に近い形をとっていると考えられるのに、三月十四日案はそれらすべてを省いたわけであり、そのことは木戸案ともその精神を異にするといわねばなるまい。その故にこそ諸侯、列侯、会盟、会誓という如きを一切省いて、

天子が神に誓い臣下は天子の意を体し、命令に服従するという形式となったものであろう。ここに於てか、諸侯会盟の如き考えは一掃されたといえよう。

このような変遷について井上清は、

「この発布の形式は……天皇が百官群臣をひきいて天神地祇に誓うことにして、天皇政權の独裁の理念を形式の上にもあらわした。つまり五条誓文は、由利案のような庶民に近い立場の発想と、福岡案のような大名連邦の思想とが、木戸によって、天皇政權独裁下の天皇と人民の一体化論……に綜合せられたものである。だから受け取る人によって、民主的にも、また天皇主義的にもその他にもとることができた。」⁽³⁶⁾

と述べている。しかし、五箇条の誓文の最終案は木戸の案とも異なっているわけで、天皇政權独裁の方向を明確にしたのは、木戸・岩倉・三条の合意にあったとみなければならない。何れにしても総題目、題目の省略は、天子と公卿諸侯を同列におくが如き考え方を否定したことを意味し、天皇の優越性を明確にし、五箇条はすべて皇基を振起する為のものであることを指示したものと考えてよからう。

若し以上の推論が認められるとすれば、五箇条の誓文は明治元年まだ基礎の定まらぬ中央政權の基礎固めをする為の一つの布石であったと見る事ができる。このことは五箇条の誓文の成立に最も尽力した木戸孝允すら、明治五年―版籍奉還から廢藩置縣をすでに終った時期―には最早すっかりその存在を忘れてしまっていたことから察することができる。⁽³⁷⁾

これに関連して田中彰は、

「誓文発布数年にして原案作成者自身が忘れてしまった五箇条の誓文は、当時から民衆とは断絶した存在だった。いや民衆にとっては、この誓文の翌日に、あらためて出された五つの太政官制札こそ身近なものであった。それには幕藩体制下と同じ民衆の守るべき倫理が説かれ、徒党、強訴、逃散の禁がうたいこまれ、また、キリシタン禁制が規定されて

いた。さらに外国人殺傷を禁じ、士民が本国から脱走することを禁止していた。そこには誓文にみられた開明性は露ほどもなく、新政府の対民衆政策が、旧幕府となんら変りないことをはつきりと暴露させていた。⁽³⁸⁾」

と説明している。誓文の表現が一応開明的にみえ、井上がいうように民主的に解釈しようとする人々もできたが、誓文それ自身を近代民主主義と同質なものと考えすることはできない。五箇条の誓文は中央集権化の為の一つの政策にすぎなかったことは上述したところで明らかであろう。

(2) 自由民権時代

さて、井上の指摘のように、五箇条の誓文の表現には開明的で民主的とみられるものがあつた。しかし、明治中央政權は間もなく誓文の存在を忘れてしまった。ところが、この五箇条の誓文の表現上の開明性、民主性を利用して、自由民権の方向へ導こうとする人々があつた。所謂自由民権運動である。

木戸が五箇条の誓文の存在を忘れていた明治五年のその翌年、所謂征韓論の衝突で多くの参議が下野し、新政府の実權は岩倉と大久保の二人の手に歸した。この二人の政治家について自由党史は、

「今や維新中興の政府は、征韓論に由りて一大變動を來し、形質共に變化して、岩倉大久保二人を中心とせる寡人専制の政府となれり、岩倉大久保二人の如き、器材誠に雄得ならざるに非ずと雖も、運用の計を公議輿論に致すことを思はず⁽³⁹⁾」

と評している。

この二人の政治に対立し、政治における公議輿論の尊重を主張したのが自由民権論者であり、その根拠として持出したのが、五箇条の誓文であつた。例えば、明治七年一月の愛国公党本誓にいう、

「我輩既に愛君愛国一片至誠の上より発憤し來つて、斯の人民の通議權理を主張保全せんと欲す。然るに之を為すの道

は、即ち我天皇陛下の御誓文の旨意を奉戴し、造次顛沛、徹上徹下、唯だ斯の公論公議を以てし、常に盟約の旨意を遵守するに在るのみ。⁴⁰⁾」

と。この公議輿論の主張が一步進めば、民撰議院設立の要求となる。即ち、明治七年一月の「民撰議院設立建白書」には、「臣等伏して方今政権の帰する所を察するに、上帝室にあらず、下人民にあらず而も独り有司に帰す、……臣等愛国の情自ら止む能はず、即ち之を振救するの道を講求するに、唯天下の公議を張るに在る而已、天下の公議う張るは、民撰議院を立つるに在る而已。⁴¹⁾」

とある。この意見に対し、加藤弘之は「議會尙早論を唱えたが、それに対する愛国公党側の反駁に、

「其初めや草莽浮浪の士首唱して藩士を動かし、藩士又其藩侯を動かし、同心協力、幼沖の天皇陛下を奉戴し、以て徳川氏の政府を踏し、政体を造り、首として御誓文をかがげ、万機公論に決すべきを以てし、別に各藩をして議員を出さしめ、以て天下の事務に干与せしむ。……且斯れ今日議院を立つるの意、蓋し藩別議員を出すの制を拾収完備し、御誓文の意味を拡充せんとする而已。⁴³⁾」

とみえて、誓文の趣旨を実現すべしとする。

勿論、自由民権論者の主張は、単に五箇条の誓文を利用したのみではなく、むしろ当時輸入されていた天賦人權説を根拠とするものであった。⁴⁴⁾

このように議會設立の要求が高まるにつれ、政府の方針は漸次的手段として地方官會議を開くこととし、七年五月二日議院憲法頒布の詔勅がでた。即ち、

「朕踐阼の初、神盟に誓ひし旨趣に基き、漸次之を拡充し全国人民の代議人を召集し、公議輿論を以て律法を定め……故に先づ地方の長官を召集し人民に代て協同公議せしむ。⁴⁵⁾」

とあって、明治五年頃には忘れられていた五箇条の誓文は、人民側からの誓文利用によって、政府は再びこれに注目言及せざるを得なくなつたわけである。この後、民間における民撰議院設立の要求がはげしくなるにつれて、政府も遂に周知の如く、明治八年四月所謂漸次立憲の詔を發せざるを得なくなつた。自由党史によれば、

「天皇之を裁可し、竟に發して四月十四日の大詔となれり。是れ実に維新五事の皇誓と相輝發して、長く青史に炳煥たる所、綸言宏壯、今仍は國民の前に新なり」⁽⁴⁶⁾

と記されている。⁽⁴⁷⁾即ち、明治政府は、一旦忘れていた古証文を、民間からの突上げによって再び取上げ、これこそ立憲政体への第一歩であると言ひ出したわけである。

この後も、例えば明治十年六月立志社建白書に、「陛下親しく公卿諸侯を率い天神地祇を祭り誓約する所の五事あり、云々」⁽⁴⁸⁾という如く、自由民権論者は機会あるごとに五箇条の誓文を立憲政治へのテコとして利用し、他方政府側は明治八年の漸次立憲の詔をうけて、遂に明治十四年十月の、二十三年を期して国会を開くことを公約せざるを得ないところまで追込まれたことは周知のところである。

即ち、五箇条の誓文は、既に明治五年には忘れられたくらいの、単なる一時的中央集権の爲の一布石にすぎなかったが、しかし、一つ一つの箇条としては、解釈によっては当時の専制政府を抑えるに都合のよい条文もあつたので、自由民権論が之を利用し、広く會議を興し万機公論に決するとは、ヨーロッパ流の議會政治を意味するものであると主張し、遂に政府も国会開設の期を公示せざるを得なかつたのである。

例えば、この「広く會議を興し万機公論に決すべし」について、

「福岡は後年、『此時平民までも此會議に与らしめる御つもりであつたか』との問に對して、『それは後から考えればそうも解釈せられるが御恥かしい話ですが当時私はまだ其考はなかつたです云々』と答えており、また『其の廣くの字の

意味は詰り列侯と同じだ即ち広く人々の意見を集めて会議するというのではなくて府藩県に亘りて広く何処にも會議を興すという義です云々』ともいつていた。⁽⁴⁹⁾

と稲田は述べている。これによつて明らかなように、この条文を議會主義的に解したのは自由民権論者の功績であり、明治政府は彼等を押されて同様な解釈をとらざるを得なくなつたと思われる。

その後は、これらの簡条は専ら議會主義的な意味に解されるようになったことは、例えば明治憲制定に關与した金子堅太郎も、

「然るに我が日本の憲法政治は畏くも明治天皇が天神地祇皇祖皇宗に御誓いになつた五簡条の御誓文に基づきたるものであるから、云々」⁽⁵⁰⁾

とか、

「この五簡条の御誓文の中に『広く會議を興し万機公論に決すべし』といふ一簡条があり、又他の条項には『知識を世界に求め大に皇基を振起すべし』といふ事がある。是は世人が熟知する通り此二簡条から憲法政治が出て来て居る。又議會も産まれて来て居る」⁽⁵¹⁾

などと述べている如くである。

(3) 敗戦直後の場合

前述の如く、天皇は所謂「人間宣言」に關して、第一の目的は御誓文であつたといひ、民主主義については既に早く明治天皇が示した民主主義があつたし、これこそ新日本を築き上げてゆく基礎となると話したと伝えられている。すると天皇は日本の民主主義は明治初年に存在したと考へていたわけである。

さて天皇は、昭和十年天皇機関説問題が起こつた時、軍人や政治家が天皇機関説を排撃している最中にも、前述の如く

天皇機関説で一向かまわないといい、或は総理大臣任命にあたっては常に憲法を尊重するようにと申渡していたのであるから、天皇個人としては民主的な考え方をとってきたと考えたことは疑いがないところであろう。

けれども、五箇条の誓文が民主主義を示すものだとする主張は納得できないので、そのことは上述したところで明らかである。ところが金子堅太郎の如く、一般には五箇条の誓文から直接的に明治憲法や議會政治が発生したと誤解しているところからみて、天皇も又そのような誤解を受けついだのであろうか。そして明治憲法は完全に民主化された憲法であり、天皇自身民主主義を身につけていると考えていたのであろう。このような推察をするのは、「占領秘録」上の中に次のような記述がみえるからである。そこには「重光葵氏の話」として、

「自分は陛下に『日本は正式にポッドム宣言を受諾して、これから民主主義諸国の一員となっても、これは決して日本従来の伝統に反するものではないと思います。我々日常陛下に咫尺しているものは、陛下が常に国民一般の意向を察知されて、これを御自身の思召とされていることは、我々のよく感佩申上げていることであります。日本国民はこれまで陛下の御心を心としてきたし、陛下も国民の心をもつて御心とされています。これが日本の眞の姿であり、いわば日本的デモクラシーと称してもいいと存じます。この一君万民の伝統を今後形式に現わして進もうというのでありまして、本質において伝統に反するものではありません。自分はこのように考えて、この文書に調印することに致したいと思ひます。』と申上げたところ、陛下は、『自分の考も全然お前の考と同じである。その通りであるから、その意味をもつて使命を果すようにしてもらいたい。』というお言葉であつた。自分は感激して退出した次第である。」⁽⁵³⁾

とみえる。これは重光が一九四五年九月二日ミズリー艦上にての降伏文書調印式にでかける直前のことである。即ち、敗戦直後の重光や天皇の考え方がここにみられるわけである。

重光の考えでは、日本は伝統的に民主主義國であり、それは日本的デモクラシーとも称すべきもので、それは一君万民

の伝統でもあるということになる。⁽⁵⁴⁾ 天皇も亦この考え方に全く同意するといっている。この伝統が一体何時頃まで遡るかについては重光は何も言っていないけれど、一君万民などを持出しているのをみれば、随分古くからの伝統とでも言いいたのであろう。天皇が全く同意であるといっているのをみれば、天皇も亦古くからの日本的デモクラシーを考えていたのかも知れない。しかし反面、天皇が所謂人間宣言に於いて五箇条の誓文を持出しているのをみれば、明治初年にその所謂日本的デモクラシーなるものが成立し、それ以来の伝統と考えていたと見ることもできよう。⁽⁵⁵⁾ ここで問題となるのは、勿論日本的デモクラシーと称せられるものの内容である。重光によれば、「一君万民」こそ日本のデモクラシーであるという。では、一君万民とは一体どういうことであらうか。例えば清水伸「逐条日本国憲法審議録」にみる吉田茂首相の答弁によれば、

「皇室の御存在なるものは、これは日本国民、自然に発生した日本国体そのものであるかと思ひます。皇室と国民との間に何等区別がなく、所謂君臣一如であります。君臣一家であります。」⁽⁵⁶⁾ 正しい、更に又、

「天皇が日本国の象徴であり、日本国民統一の象徴なりという觀念は、日本国民の何人の頭にもある觀念でありまして、これは事実と申すよりは、今日に於ては法律的事実である。例えば君民一如といい、一君万民といい、或は君臣一家といい、これは自然に発生した日本国の形態であります。」⁽⁵⁷⁾

ともいっている。吉田首相によれば君臣一如、君臣一家、一君万民はすべて皇室と国民の関係であり、日本国家の自然なる形態であるという。吉田と同じく当時の政治的支配階層に属した重光の一君万民も、吉田と同じ意味に用いられていたと考えてよからう。

では、この君臣一体とはどういうことを意味するのであろうか。昭和十二年文部省編纂の「国体の本義」によれば、

「我が国に於ては君臣一体と古くよりいわれ、天皇を中心として億兆一心、協心戮力世々厥の美を済し來つた」⁽⁵⁸⁾

と説いている。この「国体の本義」の説明では、日本では古来天皇という支配者があり、一方ではそれに仕える臣民があったという。即ち、吉田、重光のいう君臣一如、一君万民も亦、一人の支配者としての天皇と、多くの被支配者としての臣民との關係をあらわしたものにすぎない。即ち、「国体の本義」によれば、

「我々は生れながらにして天皇に奉仕し、皇国の道を行ずるものであつて、我等臣民のかかる本質を有することは全く自然に出ずるものである」⁽⁵⁹⁾

という。ここでは臣民は生れながらにして自由且平等であるのではなくて、生れながらにしてただひたすらに天皇に奉仕するものであつた。

しかも石闕敬三によれば、臣民とは、

「このような連関から考えますと、『臣民』は民主的国家における国民とは決して同じではないことがわかります。『汝臣民』という（教育に関する）勅語における呼びかけにありますところの、その『臣民』は思想・信仰に於ける自由を主張しうる個人の立場を認められていないのであります」⁽⁶⁰⁾

という如くであつて、君臣一如、一君万民等の民は、民主主義下の国民―生れながらにして自由かつ平等である国民―と同じものではなかつたわけである。従つて、一君万民下における民主主義という表現は、矛盾した主張であるといわねばなるまい。

さて、天皇の外にこの頃五箇条の誓文について発言した人に、東久邇宮首相、幣原喜重郎首相、吉田茂首相など、当時の政治的支配層に属する人々があつた。まず、東久邇宮の発言をみるに、昭和廿年九月五日の国会に於ける施政演説の中に、

「畏くも大詔に於きましては『世界の進運に後れざらむことを期すべし』と御示しになつて居ります。私共は維新の大業成るの時に、明治天皇御親ら天地神明に誓はせられました五箇条の御誓文の時精神に復り、此度の悲運にも毫も屈することなく、……平和と文化の偉大なる新日本を建設し、進んで世界の進運に寄与するのは覚悟を新たにせむことを誓ひ奉らねばならないと信じます。⁽⁶¹⁾」

とみえる。ここにいう大詔とは所謂終戦の詔書のことであるが、東久邇宮のいうところは、新日本建設の為に五箇条の誓文の精神に復るべしというものの如くである。

これより先、東久邇宮は八月二十八日に内閣記者団と初会見して色々意見をのべた後、

「以上いろいろ話したが、要約すれば、明治元年三月十四日に、明治天皇が下し賜った五箇条の御誓文に……とおきとしになつてゐる。この際この誓文を読み奉つて、われわれ国民は、この国難に善処しなければならぬ。⁽⁶²⁾」

ともいつてゐる。東久邇宮のいうところは抽象的であるが、兎に角五箇条の誓文の精神に立返れという如くで、それが今後の世界に通用する精神だと考えていたらしい。

次に幣原首相は、「人間宣言」の発せられた後の話の中に、

「『我が国民主主義の発達は既に御誓文に其の基礎を据えられたのであります。』『爾来我國の議會政治は此の本義に則り、其の健全なる発達を約束せられたのであります。』が、不幸にして近年屢々反動勢力に抑圧せられ自由の尊重、民意の暢達は其实を失ひ、宏遠なる明治天皇の思召の没却せられるに至りましたことは真に恐懼に堪えないところであります。⁽⁶³⁾」

と発言している。我國の民主主義は五箇条の誓文に発するとの主張である。

ついで、吉田首相の昭和二十一年六月以降の日本国憲法制定会議における答弁をみると、まず衆議院本会議六

月廿四日の答弁に、

「日本的民主主義の確立をと云う御注文のようであります。御尤もであります。又政府も日本的民主主義の確立に付ては、憲法草案に御覧になる通りに、非常に努力を致して、あの新憲法草案を作りあげたのであります。又日本に於ては新憲法によつて始めて民主主義が確立せられ若しくは輸入せられたのではないのであつて、維新の当時における五箇条の御誓文は、これは日本主義のデモクラシーであると私は考えるのであります。(拍手)随て又日本に於て、日本主義的デモクラシー、民主主義の確立ということは、根本は既に具つて居るのでありますから、大して難しいことではないと考えます。併しながらこれも一朝一夕にして完成することはできないのであり、又憲法が如何に立派な憲法でありまして、時に歪曲せられた――明治天皇の欽定憲法と我々は考え確信致して居つたのであります。併しながら時代の錯誤でありますが、兎に角歪曲せられて今日の敗戦状態を惹起したと致しますならば、新憲法草案について、各位に於いては十分なる御注意を以て御審議せられて、日本主義的民主主義の確立に御協力あらんことを希望致します。」⁶⁴

と述べている。この吉田の發言は五箇条の誓文は日本主義的デモクラシーであるから、民主主義は根本に於いては明治の初から存したものであるとする。ところがこの五箇条の誓文は日本的デモクラシーであるという表現に対して拍手が起つてゐるのは、議員の中にもこの意見に賛成の者が多数いたことを示すようである。

更に、吉田は衆議院本会議における六月廿五日の答弁で、

「君主政治と民主政治との關係如何という御尋ねであります。日本の憲法は御承知の如く五箇条の御誓文から出発したものととても宜いのであります。所謂五箇条の御誓文なるものは、日本の歴史、日本の国情をただ文字に現わしただけの話でありまして、御誓文の精神それが日本の国体であります。この誓文をみましても、日本国は民主主義であり、デモクラシーそのものであり、敢て君權政治とか或は压制政治の国体ではなかつたことは明瞭であります。」⁶⁵

ともいう。吉田も亦、五箇条の誓文から日本の憲法―明治憲法―が出発したと考え、五箇条の誓文は日本の歴史、日本の国情を文字に現わしたものである。こうなると、五箇条の誓文の歴史性など全く無視されるわけである。しかし、いみじくも吉田が失言したように、誓文の精神―天皇支配と臣民の服従―こそ国体である、というのは、蓋し、明治初年における誓文の歴史性を指摘したものといえなくもない。語るに落ちたといえよう。

ついで吉田は、同じ日に、

「又歴代の天皇の御製をみましても、又明君賢相の詩歌その他を見ましても、日本に於ては他国に於けるが如き暴逆なる政治とか或は民意を無視した政治の行われたことはないであります。民の心を心とせられることが日本の国体であります。故に民主主義は新憲法によつて初めて創立せられたのではなくして、従来国そのものにあつた事柄を単に再び違つた文字で表わしたにすぎないのであります。(拍手)これは私の一家言ではなくて、私は諸君に於てそう御諒承になることと考えます」⁽⁸⁶⁾

ともいつている。吉田のいうところは戦前における皇国史観そのものの、しかも民主主義は従来国にあつたものなどというのは、吉田一流の傲慢にして独断的な演説である。

この吉田の発言に対しては、共産党野坂参三議員から、「もう少し冷静に科学的に考えて」はどうかという批判があつたのは当然であつた⁽⁸⁷⁾。更に、吉田の民主主義は明治初年から存在したという考えに対しては、同じ保守党―自由党―に属する北吟吉からも批判された。北は衆議院憲法委員会に於て、

「この前本会議の質疑応答の際共産党の野坂君から現行憲法は民主主義の所が少しもないといった所が、金森國務大臣は五箇条の御誓文を現代的に現わしたもので、既に民主主義というものは日本に於いては実在しておつたというような御答弁でありましたが、私はこの憲法(新憲法―筆者註)を一層民主化すると云う立場からして、それは言過ぎではな

ろうかと思うのであります。⁽⁶⁸⁾」
と批判している。

すでにみたように、吉田や金森がいうところは、時には古くから民主主義が日本に存在したとか、或は明治初年五箇条の誓文と共にデモクラシーが確立したとかいうような、曖昧な表現で、兎に角新憲法以前にデモクラシーは存在したとするものであるが、北はこれに対して、若しデモクラシーが明治初年から存在したとするならば、今更新しいデモクラシーの憲法をつくる必要がどこにあるのかと批判するわけである。

それにもかかわらず、保守党議員は政府と共に、依然として五箇条の誓文によって日本の民主主義的政治は存在したとする。例えば、昭和廿一年七月一日における衆議院憲法委員会における吉田安（日本進歩党）の發言をみるに、

「先般来五箇条の御誓文を以て今日も北さんの野坂君の御話に対する非難の一端にもなつて居たのでありますが、あの五箇条の御誓文は、私はこれは所謂日本の本當の国体から放出する所の實際の民主主義的政治のあり方の一端でなければならぬと、斯う思うのであります。これを何故か共產党の諸君は……主權在民説を振廻すのに国民の氣持を和らげる為に作つたものであるとか、斯ういうことを言うて非難攻撃されるのであります、これが私は日本の君民一体の政治向きの表現である。日本の国体觀念からそこに出て来ているのではないかと、斯う思うのであります。⁽⁶⁹⁾」
と述べていて五箇条の誓文は君民一体の日本の国体から發出する民主主義的政治を示しているとする。

これらの意見を経た上で、吉田首相は、昭和廿一年八月二十八日の貴族院憲法委員会に於て、明治憲法は五箇条の誓文に基くものであることを主張する。即ち、

「御尋ねは新憲法によって日本の從來の政治的性格を変更するのであるかどうか。これは御意見の通りに、決して日本国民の從來の政治的性格を変更する考では毛頭ございませぬ。御承知の如く日本の憲法は決して圧制的政治の憲法では

ないのであります。又軍国主義の憲法ではないのであります。……日本の明治天皇欽定憲法なるものは、明治初年に於ける所謂五箇条の御誓文に基づいてその原則が表現せられたものでありますから、決して圧制的性質を持つものでもなければ、軍国的憲法でもないのであります。⁽⁷⁰⁾」

と。吉田によれば、明治憲法は五箇条の誓文に基くものであり、それ故に明治憲法は圧制的でもなければ軍国主義的憲法でもない、従って明治憲法下の日本の政治的性格も、新憲法下における政治的性格も変えることはないと言張する。吉田はこのように政治的性格の不変革を力説する。即ち、明治維新、明治憲法の下でも、新憲法の下でも、日本の政治的性格は一貫して変えることはない、日本の政治的性格は明治初年から新憲法に及ぶまで変化なしという、誠に恐るべき独断を、国民主権の新憲法制定の場に於いてすら、憶面もなく主張する。吉田にとっては新憲法制定の意味など全く無視されているといえよう。

以上、東久邇宮、幣原、吉田の各首相をはじめ、敗戦直後の保守政治家達の五箇条の誓文についての考え方を述べてきた。これらの人々によれば、五箇条の誓文こそ日本主義的デモクラシーの原点であり、日本の政治はここに復るべきであると述べるものである。

このようにたどって来ると、前にのべた重光や天皇の考えた日本主義的デモクラシーなる考え方は、戦後の保守的政治支配層に属する人々が共通してもっていた考え方であった。即ち、これらの人々には五箇条の誓文が明治憲法の源泉であり、五箇条の誓文が民主的である以上、明治憲法も亦民主的であるとするものであり、裏をかえせば、何を今更、民主的と称する新憲法を作る必要があるのか、という新憲法制定への反撥があったといえるのではなからうか。

しかし、五箇条の誓文を民主的とする考え方は、前述したように、五箇条の誓文なるものが、中央集権の為の一布石にすぎず、従ってそれは直ちに中央政治家に忘れられ、反って明治七年頃から天賦人權説に親しんだ人々による自由民権運

動に利用されるに及んで、⁽⁷¹⁾明治政府はこの運動に押されて、再び五箇条の誓文を問題とせざるを得なくなり、そのような自由民権運動の結果として漸く、ほんとに漸く明治憲法の成立に至ったのだという事実を忘れている。

そのことは当時の政局のリーダーであった右大若岩倉具視の明治十二年十二月の意見をみれば明らかである。即ち、

「十二月立憲政体のことに付山縣參議建議有り、此事は余、条公（三条公一筆者註）に告て曰く、明治八年四月十四日立憲政体詔書の件は其際より下官終始不同意なり、然れども既に発令あり、今之を如何とも致し難し、宜しく其緒を継がざるべからず、云々」⁽⁷²⁾

とみえる如くである。即ち、岩倉自身は元來立憲政体には不同意であつたわけで、ただ既に「漸次立憲の詔」がだされてしまつた以上、今更否定もできないからば其方向に進まざるを得まいというのである。それは民間に於ける自由民権論者の活動を無視できなかった故でもあつた。⁽⁷³⁾従つて、前述のような考え方をする人々は、金子堅太郎と同じく、宛も五箇条の誓文が明治政府によつて積極的に拡充されて明治憲法に至つた、と錯覚しているわけである。

結 語

さて、天皇は人間宣言に於いて、五箇条の誓文を国民に告げるのが「第一の目的」であるといつた。しかも天皇は、重光葵の日本的デモクラシー論に全面的に賛成したという。すると、五箇条の誓文についての天皇の考えは、吉田茂等と同様に、五箇条の誓文こそ日本のデモクラシーの源泉であると考えたものに違いない。ところが実は五箇条の誓文はデモクラシーとは無縁であること上述した通りである。それを誤解した天皇は五箇条の誓文を国民に告げることを第一の目的としたのであろう。勿論、こういう五箇条の誓文の解釈は、戦後の保守的政治支配層に共通した考えではあつた。

ここで問題となるのは、あの宣言を文字通り「人間宣言」―神格否定と受取つた側のことである。マーク・ゲインのい

うところによれば、

「マックアーサー元帥は、この勅語に対して次のような感想を発表した。『天皇の新年の勅語ははなはだしく私を喜ばせるものがある。この勅語によつて天皇が日本民主化に指導的役割を演ずることは明らかにされ、自由主義の線にそう将来の天皇の立場が正当かつ明確にされた。⁹⁷⁴』」

といわれている如く、マックアーサーは満足の意を表したという。或は又、「高見順日記」には、

「天皇は現御神ではなく、天皇と国民の紐帯は神話と伝説に非ず云々……かようなことを、敗戦前にもし私がいったら、私は不敬罪として直ちに獄に投ぜられたであろう。さような言を天皇自らいう。驚くべき変りようである。」⁹⁷⁵

と記されている。恐らく国民の側は高見順のように受取り、外国人の多くはマッカーサーのように受け取ったかも知れない。けれども所謂「人間宣言」において、神格否定は「二の問題」だったのであり、第一の目的は五箇条の誓文にあったという。すると、「天皇が変った」と考えたのは、「天皇は現人神である」と強制されてきた日本人や、或はそう思いこんでいたアメリカ人の側⁹⁷⁶の誤解であつたことになる。天皇自身の考えによれば、否定されたのは天皇の虚像にすぎなかつたのである。この「人間宣言」について、マーク・ゲインは次のような評論を下している。

「総司令部の全部の人が知っているのとおり、明治天皇は日本の戦鬪的国家主義の支柱とも象徴ともされた人物であり、たとえ彼のいくつかの勅語の修辭がどんなものであるにせよ、彼の治世四十五年間を通じて民主政治はただの一度も実施されなかつたし、またその実現を企図されたこともなかつた。……そしてそのいくつかの勅語をもつてその治世下の日本を狭隘な封建的鑄型にはめこんだのも明治天皇であつた。それなのに裕仁すなわちわれわれがその民主化を目標にしている国の天皇は、民主日本の指標を十九世紀に帰つて求めようとしているのだ。」⁹⁷⁷

と。即ち天皇にとっては、五箇条の誓文こそ「第一の目的」であり、敗戦後の保守的政治支配層にとつても、五箇条の誓

文こそ日本のデモクラシーの源泉であつた。これらの人々にとっては、明治初年以來持ちつづけたデモクラシー、その線上に構成された明治憲法、そういう日本のデモクラシーの伝統がある以上、今更敢て新しくデモクラシーを根本に置く憲法を作ろうとするのは、屋上屋を架するものにすぎない、という認識があつたものと考えられる。ここに敗戦当時の保守的政治支配層の表面的民主化への姿勢にもかかわらず、実は根柢における保守性をみることができよう。マーク・ゲインはそのことを指摘しているのであろう。「補註」

註

- (1) 「私の天皇」三百十三頁。
- (2) 佐藤達夫「日本国憲法成立史」第二卷八八五頁。
- (3) 児島襄「史録日本国憲法」一九〇—一九九頁。
- (4) 文芸春秋、昭和二十七年三月号。
- (5) 同前。
- (6) 「天皇の孤島—日本進駐記」一七八頁。
- (7) 「占領秘録」上では、「人間天皇」の宣言といっている(百三十八頁、一三九頁)。當時はそういつていたのであろう。
- (8) 本庄日記、至秘抄、昭和十年三月十一日の条。
- (9) 玉沢光三郎「所謂天皇機關説を契機とする国体明徴運動」第四章第二節参照。
- (10) (4)に同じ。
- (11) 高梨健吉訳(東洋文庫版初版一八九〇年)八一頁—九二頁。
- (12) 同上書九三頁。
- (13) 「やまとだましの文化史」七九頁—八八頁。
- (14) 同上書八八頁。
- (15) 同上書七七頁—八八頁。
- (16) 清水伸「帝国憲法制定会議」附録五〇—一頁。
- (17) 淡野安太郎「明治初期の思想」四五頁—四八頁参照。
- (18) 河原宏「第一次世界大戦と政治シンボルの転換」九頁、一三頁、(「近代日本政治思想史Ⅱ」所収)。

- (19) 小池・西川・村上「宗教弾圧を語る」一七四頁。
- (20) 同上書一七二頁。
- (21) 清水伸前掲書第二編六十章昭和二十一年九月四日貴族院憲法委員会
- (22) 「占領史録」第一卷、三二八頁。
- (23) 「図説戦後世論史」第二版二一二頁「浸透した象徴天皇制」
- (24) 武田清子「天皇観の相剋」二六一頁。
- (25) 淡野前掲書、一七頁。
- (26) 大久保利謙「明治憲法の制定経過と国体論」(論集日本歴史11所収)。
- (27) 「明治憲法成立史」上巻。一頁。
- (28) 同上書上巻、六頁。
- (29) 同上書上巻、八頁。
- (30) 同上書上巻、九頁。
- (31) 同上書上巻、一〇頁。
- (32) 同上書上巻、一二頁。
- (33) 同上書上巻、一四頁。
- (34) 同上書上巻、十六頁。
- (35) 金子堅太郎「憲法制定と欧米人の評論」一八頁。
- (36) 「明治維新」(「日本の歴史」第二〇巻)。
- (37) 田中彰「未完の明治維新」(新版)二七頁。
- (38) 同上書二八頁。
- (39) 「自由党史」(岩波文庫版)上巻、八五頁。
- (40) 同上書上巻、八七頁―八八頁。
- (41) 同上書上巻、八九頁―九〇頁。
- (42) 同上書上巻、九七頁―一〇二頁参照。
- (43) 同上書上巻、一〇三頁―一〇四頁。
- (44) 淡野前掲書三八頁。
- (45) 「自由党史」上巻、一四八頁。
- (46) 同上書上巻、一六八頁。

所謂人間宣言について

- (47) 漸次立憲の詔には、「朕今誓文の意を拡充、茲に元老院を設け……大審院を置き……地方長官を召集し……漸次に国家立憲の政体を立て、云々」とみえてゐる。
- (48) 「自由党史」上巻、一九六頁。
- (49) 「明治憲法成立史」上巻、一六頁。
- (50) 「憲法制定と欧米人の評論」一六頁。
- (51) 同上書、一七頁。
- (52) 例えば東久邇宮「私の記録」一四一頁。勝田龍夫「重臣たちの昭和史」下、一七四頁―一七五頁参照。
- (53) 「占領秘録」上、三三頁―三四頁。
- (54) 「占領史録」第一巻「重光外務大臣記者会見」にも同様な発言がみえる。二一七頁。
- (55) 前引記者会見の記事参照。
- (56) 第二編第二六号、昭和二十一年六月二十五日の衆議院本会議。
- (57) 第一編第四章、昭和二十一年六月二十六日衆議院本会議。
- (58) 「国体の本義」第一大日本国体、四和と「まこと」の条。
- (59) 同上書、第一大日本国体、三臣節の条。
- (60) 「明治支配層のイデオロギー」(早稲田大学社会科学研究所「社会科学討究」11―2)。
- (61) 「資料二十年史」第一巻、政治の条十一頁。
- (62) 「私の記録」一九三頁―一九四頁。
- (63) 佐藤達夫「日本国憲法成立史」第二巻、八九一頁参照。
- (64) 清水伸「逐條日本国憲法審議録」第一編第五章、二六三頁。
- (65) 同上書、第一編第五章、二百五〇頁―二五一頁。
- (66) 同上書、第二編第一章、四一二頁。
- (67) 同上書、第一編第五章、二八一頁。
- (68) 同上書、第一編第五章、二九二頁、昭和廿一年七月一日委員会。
- (69) 同上書、第二編第十章、八六五頁―八六六頁。
- (70) 同上書、第二編第一章四三三頁―四三三頁。
- (71) しまね・きよし「民権思想と転向」第一章天賦人權思想の条参照。
- (72) 「岩倉公吏記」下巻。
- (73) 「自由党史」上巻、第三編第四章所引「法令全集」明治十一年の条参照。色川大吉「自由民権」参照。

(74) 「ニッポン日記」(井本威夫訳)、昭和廿一年一月四日の条。

(75) 「高見順日記」第六卷、昭和廿一年一月一日の条。

(76) 佐藤達夫「日本国憲法成立史」第二卷、八八九頁。

(77) 「ニッポン日記」同上の条。

「補注」この論文脱稿後に、平川祐弘の「『人間宣言』の内と外」(「新潮」七九卷十一月号)が発表された。そこには私の知らない資料などが引用されて教えられる所が多かったが、私と見解を異にするものもあった。但し改稿せねばならぬほどの見解には接しなかったので、修正することなくこれを発表することとした。